

## 十字架と聖母の聖心

— 「フレマールの画家」周辺で制作された

《受難の道具をもつ三天使がいる十字架のキリスト》をめぐって —

蜷川順子 (関西大学)

ブリュッセル王立美術館には、ロベール・カンパンこと「フレマールの画家」周辺で制作された《受難の道具をもつ三天使がいる十字架のキリスト》が保管されている。近代のある時期に、本来の画面からもともとあった聖母と寄進者の姿が取り除かれたうえで、磔刑と受難の道具をもつ三天使の一部だけで再構成されたものである。本来の画面をオリジナルとして 15 世紀後半から 16 世紀前半にかけて制作された模写作品 2 点が、それぞれブリュッへのシント・サルヴァートル大聖堂およびマドリードのラザロ・ガルディアアーノ美術館に残されており、これらの作品から本来の画面を推測することができる。本発表は、この磔刑が聖母の聖心に現れたイメージだとする発表者の仮説の蓋然性を高めることを目的としている。そのためにここでは、浮遊する十字架、受難の道具や聖母への冠をもつ天使たちを中心に考察をすすめ、関連図像との比較から聖母の聖心だとする結論につなげる。

画面は、青地に星が散りばめられた上部の天空と、聖母や寄進者が跪く下部の大地との二層に分かれ、開かれたように見える天空の中心部に磔刑が浮かび、本来は周辺に受難の道具と聖母に載せる冠をもつ四天使がいる。一見すると空中に浮かぶ磔刑のようだが、磔刑背後の地と天空との境目が、必ずしも雲のように描かれておらず全体がハート形のものである。

天空の十字架は、ユダヤ教文書にルーツがある新約聖書外典『ペテロ福音書』などで、罪人を処罰する木製磔刑具でありながら、キリストと共にあることで埋められて光の十字架として復活する、栄光化のプロセスにおいて語られる。光の十字架は、初期キリスト教時代には、ローマ帝国再統一とキリスト教国教化のきっかけとして語られるコンスタンティヌス 1 世に現れた光の十字架の物語と並んで、皇帝の母ヘレナにより発見されその断片が各地に聖遺物として分散した木の十字架の伝承が成立する。

中世には、木の十字架から光の十字架への象徴的栄光化が、古英詩『十字架の夢』などで謳われるが、その一方で中世最大の異端であるカタリ派は十字架崇敬の否定を表明した。そのため、十字架崇敬を促すいくつかの動きが展開されたが、もっとも影響力があったのは、天空に浮かぶ十字架を磔刑の木の十字架としたフランチェスコ会のプロパガンダであろう。木の十字架への崇敬は多くの聖人図像で見られるようになる。

本図像では天空に浮かぶ木の十字架のように見えながら、聖痕授与などの契機はない。同時代に増えてくる木の十字架称揚とは別の系譜として、女性神秘家たちが語る聖母の聖心にあった十字架のヴィジョンの系譜をたどり、両系譜の相乗作用によって生まれた図像だと考える。また、救難の祈願先としての機能する同時代の聖母崇敬関連の図像と照らし合わせて、図像の性格を論じる。